

# 「セレンディピティー」を知っていますか

岩 間 秀 幸（教授 現代教職論）

皆さんは「セレンディピティー (serendipity)」という言葉をご存知でしょうか。もともとはセイロンの故事から来た言葉で、「探しもの上手」「思わぬものを偶然に発見する力」などと訳される言葉です。この言葉は、群馬大に非常勤に行っていた時、化学の先生から聞きました。

その先生がスイスに留学していた時のこと、自分の研究に行き詰まっていた時、毎日図書館に通っていたらしいそうです。そしてある時、自分の研究の周辺にある1冊の本をふと手に取った時、「あっ、これだ！」という直観が起こったそうです。それからぐんぐん研究が進んだとのこと。

よく、何か探しものをしていて、そのついでにそれとは別の何かよいものが偶然見つかるようなことがあります。そういうことをセレンディピティーと言うのだそうです。

ところで、学生の皆さんは何か情報を手に入れたい時はどうしていますか。今は、インターネットというものがあって、欲しい情報が、しかも、新しいものが瞬時に手に入ります。これはこれで有効な方法で私も大いに活用しています。しかし、図書館へ行って必要な情報の本を探しているうちに、となりに自然に自分の一生を左右するような素敵な本との出会いがあるかもしれません。そういう意味からすると、この界限は、全部が古本屋という巨大な図書館と言うこともできます。

さて、私はといいますと、29歳の時、大学に就職するまでは、本を読むといえば、自分の論文を書くための本や論文に限られていました。お恥ずかしい限りです。いわゆる専門バカですね。ところが、大学へ就職して、私の担当するのは教職ですから（私の専門は、教育哲学のソクラテスです）、教育の本はあまり読んでいませんでしたので、仕方なく、教育の本は読むようになりました。それでも、教育実践の本などは、それなりに面白かった思い出があります。しかし、そこに、私にとって、きわめて重大な事件が起こりました。

皆さんは、池波正太郎という作家をご存知でしょうか。テレビ時代劇『鬼平犯科帳』の作者と言ったらお分かりでしょうか。私としては、老年のしみじみとした境地を描いた『剣客商売』も大好きな作品です。妻の薦めてくれた一冊の『鬼平犯科帳』の文庫が私の人生を変えました。それから、一日二冊くらいのペースで（遅読の私が）鬼平犯科帳を読みました。池波さんの本なら何でも読みました。エッセイもとてもよかったです。本を読むことで人生が何倍も楽しくなりました。池波さんは小さいころから世間へ出て苦労した人です。人間について本当によく知っている人です。池波さんは私の読書と人生の恩師になりました。

私が池波さんを読み始めたのは30歳のころでした。皆さんは20歳くらいですね。私より10年早く読書の楽しみを会得していただければと思います。

本を読むのが楽しくなれば、人生に「退屈」な時間はなくなります。